

発掘新聞

9月8日号

発掘速報展 2012

開催中不定期発行

編集・発行

九州歴史資料館

電話 0942-75-9575

当たり屋続出!!

遺跡に



このような竪穴住居跡が密集する、良い（重要な）遺跡の調査担当となると、調査だけではなく、その後の報告書作成も大変（写真は行橋市延永ヤヨミ園遺跡V-5区の空中写真）

=当館撮影

運良く？次から次に大変な遺跡の調査担当となる者が続出

現在当館が行っている東九州自動車道関係の発掘調査で、なぜか次々に竪穴住居跡や古墳などの遺構が密集する、大変な遺跡の担当となる職員が続出している。

このような調査が大変な遺跡を次々担当してしまう職員を、埋蔵文化財業界では「当たり屋」と呼び、その他の職員からは恐れられている。

当館文化財調査室では、飛野室長や秦技術主査、大庭主任技師などがこれまで「当たり屋」とされてきたが、最近では齊部技術主査や岡田主任技師も加わり、「当たり屋」が増加している。

このような大変な遺跡で密集する遺構を調査する時は、遺構の輪郭を確認する作業である「遺構検出」がまず大変で、これまでの経験とカン、周辺の同じような遺跡での調査成果を踏まえて検出を行う。その後、遺構検出が正しいかどうかを検証するため、住居跡などの掘り下げ作業も慎重に行うことが必要になる。

大変な遺跡に当たり続けて30数年、これからも当たり続けます？

記者推薦による「当たり屋」、当館文化財調査室長 飛野博文

大変な遺跡は人（発掘担当者）に付いて回ると、私たちの仲間内では良く言いますが、その代表格が飛野室長です。

遺跡が飛野室長を呼んでいるとは言いきませんが（笑）、飛野室長は大変な遺跡をなぜか、かなりの割合で担当してしまい、日夜奮闘しています。

飛野室長はこれからも、良い遺跡を担当し、良い成果をあげますので、ご期待ください。

しかし、あまり慎重にやりすぎると、発掘調査期間・予算に限りがあるので、時には大胆に調査を進めることが必要な、難しい調査となることが多い。

大変な発掘調査がやっと終わったというのもつかの間、これからは当館で行う遺物の水洗いや復元、実測などの遺物整理作業も当然ながら大変で、報告書の執筆量も多くなる。しかし、「当たり屋」職員は、自分で調査した、思い入れのある遺跡であり、失われてしまった遺跡の記録を残すため、報告書作成作業に日夜奮闘している。分厚い報告書は、このような「当たり屋」職員の奮闘した記録でもある。

今後「当たり屋」が作成した分厚い報告書が続々刊行予定なので、お時間のある方は当館図書室にてご覧ください。

次号も不定期刊行ですが、現在築上郡上毛町の皿山古墳群の大型円墳を取材する予定です。